

第24回清水町みらい会議要旨

○開催日 令和7年12月11日（木）

○会 場 清水町役場別館会議室

○出席者（委員）

- ・岩崎 清 悟 座 長（静岡ガス株式会社 元取締役会長）
- ・木村 博 彦 委 員（株式会社木村鋳造所 名誉会長）
- ・長倉 一 正 委 員（有限会社長倉書店 代表取締役）
- ・三 田 功 委 員（公益財団法人ふじのくに医療城下町推進機構 常務理事）
- ・三船 美也子 委 員（一般社団法人日本親子体操協会 理事）
- ・矢嶋 敏 朗 委 員（日本大学国際関係学部国際総合政策学科 教授）

議題：個性を生かした清水町創生

- ・ 柿田川を生かす
- ・ 柿田川以外の地域資源を生かす

1 柿田川を生かす

■ 保全の取組を継承するためのビジターセンターを

- ・ 柿田川は国指定の自然遺産であるため、相当な制約があることを前提に考えないといけない。観光で遊覧船を浮かべるようなことは簡単にできない。先人が外来種駆除などの保存活動を積み重ねた結果、今日の清流がある。
- ・ 町民には誇りとして、来訪者には素晴らしい川だと柿田川と認識してもらうには何が必要か。柿田川を語る会では「入れない川だからこそ、ビジターセンターで清流の様子を視覚的に見せることが大切だ」という議論があった。
- ・ ビジターセンターは、平成29年頃に計画を立てたが、反対もあって実現しなかった。「ビジターセンター」という名称が「来る人のため」と受け取られたことも反対が大きかった理由だと思う。
- ・ 川に入れない以上、「入らずして川の良さを味わう」「町民自身が誇りを持つ」ための仕掛けが必要である。

- ・ オーストラリアでは、ウミガメを見ることができる時間は短いですが、生態を紹介するセンターがある。ビジュアルの力が大きい。柿田川を語る会では1年間をかけて多くの人が議論したので、それをてこに再度検討してほしい。
- ・ ビジュアルで四季折々の川の中の様子を見てもらうこと、保全にどれだけ多くの人が関わったか理解してもらうことが大切である。

■ 柿田川で人を呼び込む

- ・ 旅行者に対し「柿田川は第1級の河川」といった情報を出すとよい。清水町を目的地に来させるのは難しいが、短時間滞在の人や、三島スカイウォーク、沼津港に行く人に情報を出すとよいのではないかな。
- ・ 柿田川の知名度は全国区であるが、柿田川の「どこに行くか」が問題だ。来て清流を眺めるだけで感動してもらうのは難しい。魚や生物、ミシマバイカモが見えず、立ち寄っても印象が残らない。
- ・ 柿田川といえば柿田川公園とサントムーン柿田川周辺の緑だ。町の人にとってもその周辺がまちの中心で、その周りに住民の住まいがある。道路渋滞はあるものの、他の観光地で問題化しているような地域住民の生活が脅かされるおそれもなく、住民と来訪者が棲み分けられている。あの周辺を清水町の玄関口としてビジターセンター等をつくり、柿田川があると分かるようにする。三島市・清水町・沼津市を結ぶ交通網があって移動の利便性が高まると、観光客はまた来たいと思うのではないかな

■ 「住民参加」「体験の共有」「次世代の想い」でブランドを育てる

- ・ 町は、国の遺産となるような資源を持っている。若い人たちが柿田川の良さを発信する取組に、町が力を貸してくれるとよい。
- ・ 柿田川の清掃作業や外来種駆除など、町では住民参加型の活動をよくやっている。毎回大勢が参加しており、高校生は約200人が参加する。若い人は、社会参加型で柿田川に関わることで自分が楽しみになっているのではないかな。このような活動をPRするのもビジターセンターの役割である。
- ・ 富士山で涵養林の植樹活動を年1回で行っている。高校生が約100人参加してくれているほか、様々な団体が参加してくれている。

- ・ 一連の活動をパッケージにして知ってもらうことは、清水町ブランド形成に大きな役割を果たすのではないかな。
- ・ 町民を含む「中の人」には体験が、「外の人」には周遊が大切だ。柿田川を地域資源として発信するのは大事だが、受け皿が弱い。財政面が課題になるのであれば、クラウドファンディングを活用したり事業規模を考えたりすることが必要である。
- ・ 柿田川をドローンで撮った映像を活用したい。昔の柿田川の画像や映像があれば、興味を惹かれる人は一定数いるのではないかな。
- ・ 役場の中で情報発信するコーナーを設けてもよいのではないかな。
- ・ 町の SNS にはドローン画像があるが、川の中の画像がない。
- ・ 柿田川公園への建設が難しければ、サントムーン柿田川の一角にコーナーを設けることも検討できるのではないかな。ペDESTリアンデッキでサントムーンと柿田川公園につなぐ、サントムーンの駐車場を活用する、壁面モニターで川の中の映像を流すなどできれば、お互いにとって良い影響があるのではないかな。
- ・ 山梨県の忍野八海と規模感は変わらないと思うが、集客力に違いがある。受入態勢と発信力の差だと思う。同じ富士山の湧水なので、柿田川でも受入態勢ができれば観光客を集められるのではないかな。
- ・ 柿田川を語る会のメンバーに若者はいないので、将来のため、20代・30代のアイデアや希望を入れたい。若い人の意見を聞く機会づくりが大切であり、「こういう町であってほしい」という意見が聞けると思う。
- ・ サントムーン柿田川と柿田川、運動公園の一带をゾーンとして考える必要がある。

■ 「水」を活用する

- ・ 安全で枯れない水は産業と結び付く。長野県では川の中でわさびを育てている。御殿場の方でマスの養殖も始まっている。
- ・ 柿田川の水利権は国交省にある。清水町は周囲の土地を購入し、緑地を保全している。
- ・ 北海道の羊蹄山には「ふきだし湧水」があり、利用して保存水を作っている。周りには何もなくて人は集まらないが、コンビニに行けば名水を使ったコーヒー

やゼリーが買えるなどブランド化している。一般市民にとって分かりやすく、手軽に手に入るものがよい。

- ・ かつて清水町にも養殖業がたくさんあったと聞く。今の養殖は技術が向上し、温度管理等、しっかりした容器で生産性の高い方法を取っている。自然に獲れる魚が減っているため、養殖業はこれから増えていくのではないか。
- ・ 大学生と「三島を中心とした観光」について議論した際に、「スモールスタートをつくってはどうか」という話になった。「水」をキーワードとし、楽寿園の前で水やコーヒー、お茶のイベントをしたらどうか、という案が学生から出た。

2 柿田川以外の地域資源を生かす

■ 先進企業を呼び込む、育てる

- ・ 顧客を多様化しようとするすると様々な規制にぶつかるが、先進企業と情報交換できれば、どのように規制をクリアしていけば良いかが分かるので、先進企業同士の交流の場がほしい。典型的な3K企業は採用活動に悩んでいる。近隣に大学が多くないため、全国から人材を取らないとならない。人口減少の影響で、20年度の国内市場は相当縮小すると見込まれるため、強い企業になり体制を維持する必要がある。成長の軸は海外で、国際化は必要だ。
- ・ 国内市場が縮小し、残れるのは特色ある企業である。一業種の顧客だけでは危ういので、自動車、飛行機など、幅広い分野で顧客を得ることが重要な戦略である。

■ 卸団地の活用と大学との連携

- ・ トヨタがウーブンシティをつくり、日本の法制度ではできないことの実証実験を進めようとしている。卸団地を「小型ウーブンシティ」にできないか。日本は規制が多く、そういう環境を作らないと清水町にスタートアップ集積は難しい。
- ・ 県内の国公立大学は県東部への進出に前向きである。地域に貢献するため大学はより密着した活動をする。学生が東部に来て企業と一緒に研究テーマに取り組むと、企業と学生の距離も近くなる。

- ・ 卸団地の空きスペースをインキュベーションセンターとして活用してはどうか。
- ・ 県では、企業の付加価値を高めた産業への転換を支援している。産業支援機関が提供できるのは、自分たちが作ったネットワークである。先月、沼津市のプラサヴェルデで産業祭を開催したが、大学や山梨、愛知、東京などから 80 あまりの出展があった。若年者に技術を見てもらいたいという声もある。
- ・ 東証に上場した町内企業があるなど、地域に尖った企業は多い。

■ 平坦な地形を生かすために

- ・ 調整区域をなくせば、豊かな緑と平坦な地形を生かすことができる。町のいちばんの弱みは道路で、渋滞が慢性的に生じていることが挙げられる。清水町は「住み続けたいまち」ナンバーワンで、富士山が見える眺望の良さや柿田川の自然があるが、欠けている要素は道路である。住みやすい町と言われ続けるか不安を感じる。
- ・ 建築物の高さ制限もあった方がよい。どこからでも富士山が見えるようにすべきだ。
- ・ 住む人が増えれば入る場所が必要になる。若い世代が「未来にわたってここに住み続ける」と思うとき、どのような街並みの中で住みたいか、自慢でき、誇りになる街並みはどんなものを聞いてみたい。意見が言いやすい催しがあるとよい。町としてできる範囲で、すり合わせていくことが必要だ
- ・ まちづくりは一度にできるものではなく、30～50 年かかる。どういう方向性にするか、それが継承されないとできない。柏の葉もロングタームでまちづくりを考えていた。清水町がどういうまちづくりをし、どういう人に住んでほしいかという思いが入っていることが大事だ。